

佛大通信 4

Butsudai Tsushin Vol.499

Neo
Kyoto

社会福祉学部社会福祉学科 末崎栄司 教授

×

和傘職人 西堀耕太郎

伝統は革新の連続形！ 世界を魅了する、和傘の美

心のスケッチブック

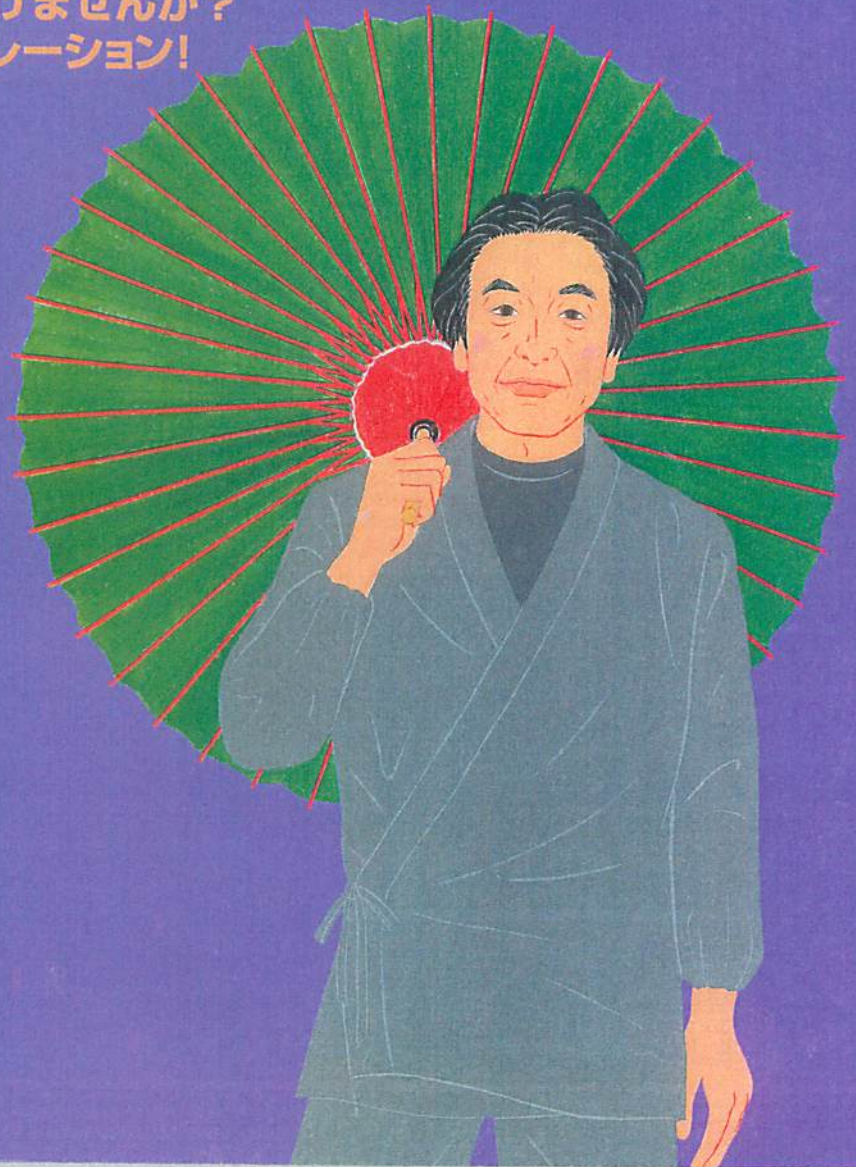
自分を見つめに出かけませんか？
旅は人生のインスピレーション！

社会学部現代社会学科
崔 銀姫 准教授

研究室訪問

教育学部教育学科
後藤 直 准教授

鷹陵の栞
もっと英語を！
持留浩二 先生



私の好きな言葉

人として

この言葉にはいろいろな意味や理解の仕方があると思いますが、私には次のように理解しております。それは自分の責任のとれる範囲で人のために何かをやっていることだと思っています。この言葉を私の頭や心の中で意識しながら生きていきます。

末崎栄司

文部科学省認可 私立大学 佛大通信 Vol.499 発行日 2019年11月20日 発行所 佛大大学出版部 〒055-8501 京都府京都市中京区西本町二丁目1番1号 TEL:075-751-7221 FAX:075-751-7222

西堀 耕太郎×末崎 栄司

伝統は革新の連続形！

世界を魅了する、和傘の美



Interviewer

末崎 栄司 教授
社会福祉学部社会福祉学科

トントントンとすり鉢で糊を練る音が響く工房内には、貼りたての色鮮やかな和傘や国内外からのオーダー傘がいっぱい。そんな中で行われたのが、和傘の技を通じて日本の美意識を世界へ広めたいと挑戦しておられる西堀さんと、京都で継承される伝統の和傘に、日本ならではの美しさを感じると語る末崎先生との「対談。伝統文化の新しい未来が見えてくる対談となりました。」

伝承

門前に傘を作り続け数十年
和傘の技を今に生かしたい！

末崎 工房には、いろいろなデザイン
の和傘がありますね。あと、お店
の正面にある「人形の寺 宝鏡寺」
の境内に傘が干してある光景も風情
があつても素敵だと思います。

西堀 最近、和傘をインテリア用
に欲しいという海外の方や、木の葉
を漉き込んだ模様和傘をご注文い
ただく方など、以前にはあまりなかつ
たオーダー品が増えていますね。私
が職人を目指した七年前は、月に一
本注文があるかどうかという状況で
したが、インターネット販売の導入
が功を奏しました。

末崎 一本作るにはどれくらいの時
間がかかるのですか？

西堀 和傘作りには植物性の油を使
うため、天日干しの期間をきつち
り取ることが肝心です。そのため、お
よそ二〜三週間かかります。また、
広いスペースも必要になりますので、
昔から境内をお借りして天日で乾か
しているわけです。

末崎 一人前に傘を作れるようにな
るには何年ほどかかるものですか？
西堀 三年は修業が必要かと思いま
す。和傘作りはすべて手作業で機械



「日本の美意識を世界に伝えたい、
和傘に出会った瞬間にそう目覚めた」

— 西堀

は一切使いませんし、製法や竹、真
鍮の道具なども江戸時代から変わら
ません。また、竹はまっすぐに見え
てもそれぞれにクセがあるので、道
具で計つてもうまくいきません。勘
で竹のしなりを調整したり、骨と骨
の間隔なども目分量で計りながら、
紙を貼つていかなければいけないの
で、相応の時間が必要です。また、
竹や紙の状態は気温や湿度にも左右
されるので、経験が大きく関係して
きます。

末崎 見たところ古い傘などもあり
ますが、新しく作るだけでなく修理
もされているのですか？
西堀 京都には、伝統行事などに使
う傘。例えば家元が茶会で使われる
野点傘などが数多くあります。こう
した昔のものは修理して使うのが前
提になりますので、通常の傘作りら
に加えて修理も行っています。数十年
前に嫁入り道具として使った和傘の
修理依頼など、個人のお客様からの
依頼も多いんですよ。

進化

雨模様太陽、照明！

光をデザインする和傘の可能性

末崎 新製品のランブシェードは、
とても洒落ていますね。傘がパツと
広がるのと同じように、折りたたん
だり開いたりできるアイデアがあつ
ても斬新ですね。

西堀 折りたたみ式の形状には、和
傘作りにはない技術が生かされて

末崎 私が小学校の頃は、こうした
和傘に番号を打った置き傘が学校に
何本も置かれていました。
西堀 今では和傘と呼ばれる傘も、
昔ほどどこにもある存在でした。和
傘の最盛期は昭和十年代で、年間千
四百万本も作っていたそうです。し
かし、戦後五十年間ですっかり減つて
しまい、京都市内に二百件あつた傘屋
も今や当店一件となりました。
末崎 そんな厳しい環境の中、生き
残ることができたというのは、努力
の賜物なのでしょうね。

西堀 和傘文化を今から復活させる
のは困難ですが、職人として江戸時
代から伝わる技術を絶やすわけには
いかない。そんな決心から、傘の技
術を活かした新製品として、照明デ
ザイナーとコラボレーションを行い照明
器具を開発しました。

いて、現在この構造で特許を申請し
ています。取り外しや収納が便利
で、幾何学的な美しさや、和紙を通
したやわらかい光の表情を楽しんで
いただけます。また、和風照明の
「KOTORI」プロジェクトが、東京
で行われた「JAPAN SHOP 2007」
で「JAPAN SHOP SYSTEM AWARD
2007」奨励賞を受賞するなど国内
外問わず反響が大きく、今後はイタ
リアやドイツなどで行われる展示会
にも出品を予定しています。

末崎 こうしたモダンな照明器具な
ら今の生活空間に違和感なく取り入
れることができそうですね。

西堀 デザイナーと何回も試作を重
ね、今のフォルムに仕上げるのに二
年ほどかかりました。傘の開閉は、
今では当たり前のように感じられ
いるかもしれませんが、実は複雑な
構造をしていて、円筒形のデザイン
に應用するのは難しいのです。最初
は傘の形のままの円錐形状のランブ
シェードなどを作って、インテリア
商品として発表していましたが、反
応はあるものの一般的な普及には結
び付きませんでした。理由は、現代
のライフスタイルに合っていないなかつ
たからだと思います。

末崎 雨傘という固定観念から離れ
てみたことで、インテリアの道具と



「伝統は、革新が連続して伝わっていく。和傘文化は、生活様式に応じて起きた革新の連続」

西堀



傘だけでなくさまざまな小物がそろった日吉屋内



革新的に入った道具類。中には江戸時代から受け継がれているものも

西堀耕太郎

プロフィール
和歌山県生まれ。高校卒業後カナダに留学。その後、日本文化への造詣の深さを確め、公務員となるも、留学時代に抱いた思いと縁が手伝い、妻の実家である京和傘老舗「日吉屋」で手伝いを継承。現在、和傘職人として伝統技術を生かした新しい日本文化を発信中。
株式会社 日吉屋 <http://www.wagasa.com/>



「新しい傘作りができたというところでしょか？」

西堀 最終的にヒントになったのは、イサムノグチ氏の有名な和紙の「AKR」シリーズ。氏がこのシリーズを作るきっかけとなったのは、鶴岡いを見に訪れた際に岐阜で見つけた提灯だそうなんです。その際、折りたたむことでフォルムが変化する提灯の技術を使えば、灯りにさまざまな表情を作ることができるとは考えたデザイン化されたそうです。小さくためて持ち運ぶことができ、提灯を広げようになるとパツとスタンドになる。この発想を借りれば、和傘の灯りも世界で楽しんでいただけはずと考え、和傘の技術工程に新しい木型を取り入れてリビート生産にも対応できるランプシェードがようやく完成しました。最近では、商業空間のインテリアにも使われ始めています。

新発想 職人への転身は運命

技術は守り、発想は攻める！

末崎 職人になれる前は、公務員をされていたそうですね？

西堀 和歌山県の新宮市で公務員をしていました。ある時ここで、エリザベス女王が美しい和傘の下でお茶を楽しむ野点風景の写真を見る機会があった。驚きと同時に感動を覚えました。私自身は以前カナダに留学していたことがあるのですが、日本人なのに日本文化についてあまり語ることでできない自分を恥すかしく感じた経験がありました。そうした背景も手伝って、日本の伝統文化である和傘作りをやってみたくて強く思ったのです。しかし、当時の日吉屋は廃業寸前。何とかしようと、IT関連のビジネスをしていた弟に協力してもらってホームページを立ち上げました。するとさっそく東京から注文があったんです。その後も徐々に全国から注文が入るようになり、来店される方も増えました。

末崎 さっと伝統を継承する運命だったのでしょうか。ちなみに、和傘の起源はいつ頃なのでしょうか？

西堀 傘の起源は平安時代で、お茶や仏教のように中国から伝わったとされています。最初から今のよう

「日本文化を愛する職人氣質とベンチャー精神の融合が、きつと伝統に新しいシーンを拓くのでしょか？」

末崎



形だったのではなく、邪悪なものから身を守る天蓋のようなものが最初で、身分の高い人にしかかけられる日除けとして使われていました。それがやがて、すげ笠や蓑に進化し雨除けとして民衆に使われ始めるようになり、江戸時代に今の傘のような形に変化しました。しかし、戦後に入ると機械による洋傘が大量に生産されるようになり、利便性や値段の面で劣る和傘は急速に衰退。今では和傘屋は全国に十件ほどしかなくなっています。

末崎 現在の形になるまで進化を繰り返してきたということですね。

西堀 和傘がこれまで長く伝わってきた理由は、時代を越える優れた技術が生かされているからです。開いたままのすげ笠や蓑が、小さくたためる傘に変わり、さらに便利な今の傘に進化した。このように、伝統は革新が連続して伝わるものだと思います。江戸時代とは生活様式が違う現代でも、その技術が生かされているからこそ伝統を守っているのだと思っています。

末崎 「守る」ということは常に「新しく」ということでもあるのです。

西堀 傘職人はもはや日本に数人しかいません。祇園祭などで用いられる文化財の修復なども私たちの使命

です。ですが、そのためにはまず民間企業として生き延びていかなければならない。この危機感をエネルギーに、今後も和傘屋にしかできないもの作りを挑戦していくつもりです。将来的には、ファッションデザイナーとのコラボレーションや、新素材を使った和傘作りなどもしていきたいと考えています。

末崎 今回、あまり馴染みのない和傘職人さんが、どのような姿勢で仕事と向き合っておられるのかということに興味があって対談させていただいたわけですが、「伝統は厳しく発想は新しく」という西堀さんのベンチャースピリットにとっても感動しました。老舗の世界で型を破る勇氣も応援していきたい。その先にとっても明るい未来を感じます。

西堀 確かに、既成概念を破ることは周囲の抵抗もありました。しかし、私自身が跡継ぎとして生まれた人間ではなく、違う分野から飛び込んだことが、この世界に新しい風になればと考えています。日本の美しい和傘文化を世界に伝えたい一心で頑張っていきたいと思っています。



After Interview

西堀さんは伝統的な和傘の技術を伝えていくにあたって、毎日、危機感をもって仕事に取り組んでいるということでした。今日は何とか和傘が売れて生活ができたとしても、明日はどうなるかわからないからです。伝統を引き継いでいくためには、生活が成り立たなければそのことができないからだとことです。そのために一生懸命、仕事に励んでみえる姿に感動しました。

末崎栄司

プロフィール
三重県生まれ。同朋大学社会福祉学部勤務を経て、2002年4月佛教大学社会福祉学部に着任。専門は社会福祉学。